

大学初年次のレポート作成指導で引用をどう扱うか

中村 かおり (拓殖大学)・近藤 裕子 (大正大学)・向井 留実子 (東京大学)

1 はじめに

これまでの引用指導

形式的な説明にとどまり、直接引用と間接引用の使い分けや引用の目的に触られることは少ない(近藤他2016)

実際の学生の産物

特徴(二通2007)

- ①原文の文脈や論理展開を無視して、必要部分を切り取る
- ②自分の意見を引用文だけで語らせてしまう
- ③直接引用部分が冗漫なため、その部分を含む文や文章の論点が不明確になる

傾向 直接引用>間接引用

2 直接引用の問題点

直接引用とは元の文章の表現を変えずにそのまま用いるもの。「もとの表現そのものに意味があり、そのまま伝えることが重要な場合に用いられる(市古2014)

【例1】の問題点

- 表現そのものが重要でない箇所を「括弧」でくくっているため、特別な意味があるかのように見える。
- 引用部分の文体が前後の文体と揃わないために読みにくい。
- 必要以上に情報を取り込むことで冗漫になり、(網掛け部)引用の目的がわかりにくくなっている。
- 他者の主張(下線部)まで含み、それを書き手の主張としている。

例1 大学が持つ特質として、丹羽雅代・上田寛(2015)によれば「教員と学生・院生、常勤及び非常勤と多様な雇用形態の教職員とが集まって、さまざまに関係性を持つ大学においては、権威的な関係が生じやすいことがあります。そういう点ではハラスメントが発生しやすい環境にあることを深く認識しなくてはなりません。」という。事件発生当時の日本では、現在よりも女性の尊厳が軽んじられていたため、この権威的な関係が、被害者に抵抗や告発を躊躇わせてしまっていたのではないかと考察する。

【例1】は大学初年次の学生が「キャンパス・ハラスメントの実態とその対策」と題して書いた論証型レポート(2000字)の一部

引用の目的がわからず、展開に合わせたつながりができない

3 間接引用の利点

引用を行うには

二通(2007)「原文の内容や筆者の意図などを正確に理解したうえで、論文の目的に合わせて引用部分を選択し、引用方法や形式、表現などを使い分けながら適切な形で自分の文章に組み込んでいく」操作が必要。

引用部分を「権威的な関係」を中心にまとめ、間接引用に書き直した例

例2 大学が持つ特質として、丹羽雅代・上田寛(2015)によれば「**教員と学生・院生といった立場や常勤及び非常勤などの多様な雇用形態からハラスメントにつながる**の教職員とが集まって、さまざまに関係性を持つ大学においては、権威的な関係が生じやすいことがあります。そういう点ではハラスメントが発生しやすい環境にあることを深く認識しなくてはなりません。」という。事件発生当時の日本では、現在よりも女性の尊厳が軽んじられていたため、この権威的な関係が、被害者に抵抗や告発を躊躇わせてしまっていたのではないかと考察する。

- 他者の主張部分が不要となり、文体差による読みにくさも解消され、冗漫さもなくなる。
- 後に続く「権威的な関係が、被害者に抵抗や告発を躊躇させた」という本来の書き手の主張がより明確になる。

書き手の主張を支えるという引用の目的に適った文へ

引用は、書き手が外部の情報と自分の内部にある主張を頭の中で付き合わせ、それを論の展開に合わせて新たな文に再構築する作業。

間接引用は、引用の原理の理解に有効

5 初年次における引用指導のあり方

アカデミック・ライティングにおける引用指導では、引用形態の選択や要約の仕方などと、全体の構成、論の展開、引用の目的との関連を意識化させることが必要(中村他2016)

- 初年次の学生は、外部の情報を自分の文章に取り込む方法や展開や目的との関連づけの感覚がわからないため、直接引用でつなげる傾向がある。(図1)
- 直接引用や圧縮要約では、引用部分の展開が変えられないため、流れに合わせたつながりが難しい。(図2)

間接引用は、構成、論展開、引用の目的との関連づけの意識化に有効

4 間接引用指導の問題点

従来の引用指導

形式的説明に終始し、引用の目的との関係説明なし。間接引用の練習は、文章全体を圧縮する要約。

教科書Aの説明

形式的な説明のみで、間接引用を要約と説明

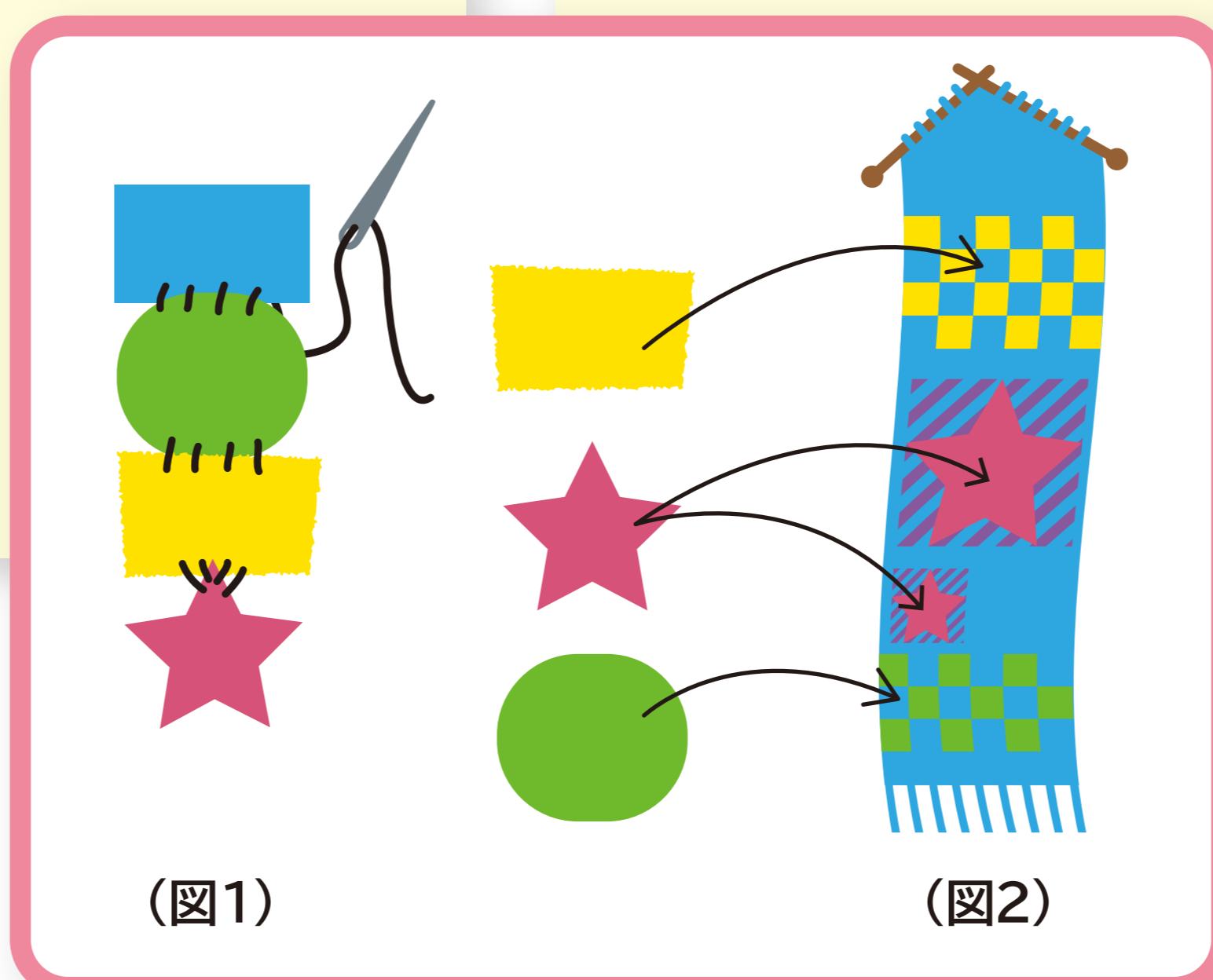
直接引用=紹介したい部分をそのまま抜き出し、「」をつける
間接引用=紹介したい部分を要約して使う

要約のやり方の説明

筆者の主張を見つけて線を引く
重要な主張をつなげて短くまとめる
具体例や比喩、修飾、引用、説明部分、反復部分、言い換え部分はカットする

この説明に従って、要約したものを引用して書き直した例

例3 丹羽雅代・上田寛(2015)によれば、**大学は教員と学生・院生、多様な雇用形態の教職員とが集まって、権威的な関係が生じやすいことがあり、ハラスメントが発生しやすい環境にあることを深く認識しなくてはならない**という。事件発生当時の日本では、現在よりも女性の尊厳が軽んじられていたため、この権威的な関係が、被害者に抵抗や告発を躊躇わせてしまっていたのではないかと考察する。



(図1)

(図2)

圧縮した要約を引用してもつながりの点で直接引用と同様の問題が残る

6 まとめ

初年次のレポート作成指導においては、難易度の調整も必要であるため、直接引用と間接引用それぞれの特性を生かし、理解度に応じた段階的な指導を考えていきたい。

参考文献

- 市古みどり(編著)(2014)『アカデミック・スキルズ資料検索入門——レポート・論文を書くために——』慶應義塾大学出版会
- 桑田てるみ編(2015)『学生のレポート・論文作成トレーニング』実教出版
- 近藤裕子・中村かおり・向井留実子(2016)「アカデミック・ライティングにおける引用指導の課題」『日本語教育方法研究会誌』23(1), pp.8-9
- 中村かおり・近藤裕子・向井留実子(2016)「アカデミックライティングにおける不適切な引用文の分析と課題」『2016年日本語教育国際研究大会予稿集』(電子版)
- 二通信子(2007)「外からの情報を自分の文章にどう組み込んでいくか——アカデミック・ライティングにおける引用の学習——」『2007年度日本語教育学会春季大会予稿集』pp.283-284